

## 勤続20年 ヨーロッパ旅行 ツアーでは味わえない旅を楽しんできました

研究所附属病院 臨床検査部 主任 則松 洋子さん

このたび私は、病院勤続20年の海外旅行として、9月22日から10月1日の10日間、スペインと、ポルトガルへ行ってきました。主人がポルトガルの欧州細胞学会に参加するため、一緒に行くことにしました。ツアーではないため、あらかじめの旅行計画もあまりなく、同行した7人で何処に行こうかと計画を立てながらの旅でした。天候にも恵まれ、毎日晴天でした。スペインでは、新幹線でバルセロナへ行き、ガウディが生涯を捧げ、今なお未完の聖堂であるサクラダ・ファミリア、カサ・パトリヨなどを見学し、天才ガウディのすばらしい色彩、曲線を用いた建築様式に感動しました。また、王宮はまるで美術館か博物館でもあるように、階段、壁、天井などすべてが芸術家の作品で飾られていました。夜は本場のフラメンコを鑑賞し、歌、踊りも大変情熱的で食い入るように見てしまいました。



▲サクラダ・ファミリア

ポルトガルでは、リスボンに滞在し、サン・ジョルジュ城を観光しました。そこでの眺めは最高で、赤い屋根が立ち並ぶ情緒ある街並みが一望できました。また、発見のモニュメント、川からの侵入者を見張るために建てられたベレンの塔などの見学もできました。夜にはディナーをとりながら、ファド(生活の苦しさ、切ない恋心、郷愁の想いなどを歌っている)を聴き、マイクなしで歌う哀切の歌声に感動しました。マドリードは芸術的な建築物の建ち並ぶ街でしたが、リスボンは石畳の路地やアズレージョ(絵タイル)の古い家々が並ぶ街でした。それぞれに違った情緒がありました。驚いたのは、路地の両側に隙間なく縦列駐車してある車。前の車を押しだしながら出て、少々傷つけても平気のようです。日本では考えられません。

治安はあまり良くなく、スペインの地下鉄では、日本語で「スリに注意」とアナウンスが流れていました。また、障害者や貧しい老人が、直接「お金をくれ」と言ってきたり、地下鉄や道端でお金を恵んでもらっていました。日本は過ごしやすいのだと感じました。反面あまり裕福ではないポルトガルの人たちは、サービス精神があり、どこでも英語が通じ、タクシーもホテルの人も大変親切でした。そして、屋根がオープンな2階建バスでは皆2階に乗って陽をサンサンと浴びており、国民性を感じました。トラブルとしては、マドリードからリスボンに行く際、空港がストライキを起こしていたため、翌日リスボン入国となったことです。航空会社との交渉など、同行した先生がしてくださったため大変助かりました。英会話の必要性を痛感した場面でした。

しかし、毎日観光をしながら、ランチは行き当たりばったりのオープン・カフェで、ガイドブック片手に「this」「this」と注文しながらもゆっくり楽しみました。行きたい所は自分達で調べ、携帯電話で連絡とりながらの行動です。バス、路面電車、地下鉄などもよく利用しました。自由行動ばかりなのでツアーにはない楽しみ方ができ、少しですが異国を感じながら過ごせたような気がします。リスボンでは、学会にも参加し、そこでのパーティーやディナーにも出席できました。非日常的な毎日を満喫した思いです。これを機に、またいろいろな国へ行き、素敵な出会いをしたいとの気持ちを大きくしています。

今回はこのようなすばらしい機会を与えてくださった理事長及び関係者の皆さまに深く感謝いたします。ありがとうございました。



▲王宮中広場



▲リスボン市街